

木

文化 学芸 こだま

水

科学 生きる

火

暮らす

月

国立がん研究センターが開発した喫煙対策支援プログラムの流れ

ステップ0	1
ステップ1 (1カ月)	2~
ステップ2 (1カ月)	2~
ステップ3 (1カ月)	1~
ステップ4 (3カ月)	3~

福井県健康管理協会副理事長で県民健康センター所長の松田一夫医師が執筆した小冊子「大腸がん検診の重要性」が、日本健康増進財団(東京)から発刊された。松田医師は「大腸がんは治る病気なのに、他の先進国を比べて死亡率が高い状況。検診の重要性を考えるきっかけになれば」と話している。健診や研究などの事業に取り組む同財団の機関誌「いきいき健康だより」(2020年春号〜21年冬号)に掲載された連載4回分を一冊にまとめた。大腸がんの罹患率やその原因、進行度に応じた治療法を解説。定期的な検診に加えて「便潜血検査で陽性だった場合、必ず内視鏡による精密検査を」と呼び掛けている。



大腸がん検診 重要性を解説

も大腸がん死亡率が高く、英国などは死亡率が徐々に下がっている点を指摘。受診率を正確に把握できていない日本の検診システムの問題点を指摘し、さらに精密検査を勧奨する体制づくりの大切さを訴えている。

松田医師

(福井県民健康センター所長)

連載、冊子に

「いる」という特徴があることをつかんだ。それを踏まえ、医療従事者の支援を受けて職場のリーダーである社長と健康管理担当者が従業員に禁煙を促す、半年間の「喫煙対策支援介入プログラム」を開発した。

大企業

煙を頑張っている人を応援したくなった」(非喫煙者)などの感想が寄せられた。チームはプログラムの効果を本格的に検証するため、全国の中小企業を対象に研究への参加を募っている。

原因、進行に応じた治療法も

厚生労働省のがん対策推進協議会委員などを務める松田医師は、サブタイトルに「大腸がんを命を落とすのは日本人だけ?」を入れた。発刊に当たって「日本のがん検診体制を抜本的に見直し、検診や精密検査の受診率が向上すれば、大腸がんの死亡率は格段に低下できる」と力説している。小冊子は関係機関に配布されている。財団のホームページでも公開されており、無料で閲覧できる。

(前田卓)

日本健康増進財団から発刊された「大腸がん検診の重要性」を示す松田医師(福井市の県民健康センター)